

# 姉かえる

作／広島友好

○時…近い将来

1景…二十年目の憲法記念日の休日

2景…1景から約半年後

3景…2景から約一年後

○所…宋崎姉弟のマンションのリビングルーム。

(2景ではパソコン上の画面もあり…中東の架空の国パラク。その戦闘地域後方の日本国防軍の軍事キャンプのテント内)

○登場人物

宋崎有樹(そうざきゆうき) 姉 二十代やや後半

宋崎公彦(そうざききみひこ) 弟 二十代前半

澤口瑞穂(さわぐちみずほ) 介護ヘルパー 二十代半ば

有樹の上官(声のみ) 国防軍隊長

冒頭に次の文章が提示される。

『日本国憲法がある種の「色」に改定され二十年。きょうはその憲法記念日の休日。  
この芝居は、ある上層家庭の姉と弟、そして彼らと出会った若い女の話である。』

## ■ 1景

君が代がおごそかに流れている。

姉の宋崎有樹と弟の公彦が立って、姿勢を正して「君が代」を歌っている。

有樹・公彦 ♪君が代は 千代に八千代に さざれ石の 巖と……………

……その二人の様子を背後からだれかの影が見ている。

有樹 (気づいて) ——だれ?

人影はさっと消える。

公彦 (振り向いて、見て) いないよ、だれも。  
有樹 おかしいなア……………

君が代の演奏が終わる。

有樹と公彦はソファにすわり、くつろぐ。

ここは宋崎姉弟が住むマンション。そのリビングルーム。かなり豪華だ。向かって左に入ると玄関とトイレ・洗面所がある。向かって右に入ると台所。リビングの右奥のドアはおじいちゃま（宋崎新之助）の部屋に通じている。朝まだ早い時間。

有樹と公彦はソファにもたれ、大画面のテレビを見る。テレビは舞台正面に置かれているが、観客からは見えない想定。

有樹は上にサッカー日本代表のユニフォームを着ている。公彦は部屋着。テレビではサッカーアジアカップ、日本対パラク（中東の架空の国）戦を放送している。

公彦 でも、さあ。サムライっておかしくない？

有樹 え？

公彦 選手のこと、サムライとか言うじゃない日本代表の。あれって、おかしくない？

有樹 言うでしょ、サムライブルーとか。

公彦 サムライなんていないでしょ、ほとんど。この人たち元は百姓や商人なんじゃないの。

有樹 バカ。そうかもしれないけど。海外出たら、日本の選手はやっぱりサムライよ。

（テレビの応援に合わせ）行け行け行け行け！ ウーッッ、ニッポン！ ウーッッ、ニッポン！ 行け行け行け行け！ ウーッッ、ニッポン！ ウーッッ、ニッポン！

公彦 あああ。（大あくび） 今何時？

有樹 七時。

公彦 やっべ。早起き。

有樹 ふふ。たまにはいいよ。

公彦 ですね。

有樹 合コン？

公彦 じゃないけど。飲みすぎた。（小さなあくびをする）

有樹 （あきれて微笑むが、弟への愛情が感じられる）

有樹は立って台所に行き、ビスケット（高級品）の箱を取ってくる。

有樹 ビスケ食べる、公彦？

公彦 朝から？ いいよ（いらぬ）。姉貴食べれば。

有樹 そうする。

有樹は手振りを付けて応援する。

有樹 行け行け行け行け！ ウーッッ、ニッポン！ ウーッッ、ニッポン！

有樹はソファに戻り、ビスケットを食べ始める。

有樹 思うんだけど、パラクってなんでアジアなの？ 中東でしょ？

公彦 さあ。昔から。

有樹　なんでアジアカップに出てんの？  
公彦　基本、中東もアジア枠だから。  
有樹　なんなの？　中東と一緒にしたにして？  
公彦　さあ。FIFA(フィフア国際サッカー連盟)に聞いてよ。弱いからじゃないの、アジアも中東も。で、一つの枠なんじゃない。  
有樹　この国ってさ、テロってんじゃないやなかったっけ、アメリカに？  
公彦　宣戦布告。  
有樹　出ていいの、サッカー？  
公彦　休戦中じゃないの、知らないけど。それにテロリストって、基本、国と関係ないし。  
有樹　関係あるでしょ。パラクがテロリストかくまってるのよ。アメリカの敵でしょ。アメリカの敵は日本の敵よ。アメリカの戦争は、日本の戦争。  
公彦　原油価格上がって、日本は大迷惑ってか。

短い間。

公彦　んでも、またうちって儲かっちゃうわけ？  
有樹　やな言い方。  
公彦　だって。パパの会社——あれでしょ。戦争すればするほど。  
有樹　あんたの会社でしょ、ゆくゆくは。  
公彦　パパの会社、そういう会社じゃない、軍需産業。  
有樹　まっとうな会社よ。国家のためになってるんだから。  
公彦　戦争サマサマ。  
有樹　やめなつて。怒るよ。  
公彦　はいはい。(ほがらかに笑う…お坊ちゃま育ちで笑い方に嫌味がない)

有樹はビスケットを食べるのをふとやめ、

有樹　旗出してくれた、公彦？

公彦　へ？

有樹　日の丸。

公彦　アア。あとでやっつく。なんの日だっけ——？

有樹　バカ。大学行ってんの。憲法記念日でしょうが。

公彦　アア、憲法のできた日。

有樹　変わった日。

公彦　アア、変わった日ね。生まれてなかったわ、俺。

有樹　生まれてたよ。今年で二十年になるんだから。あんた一、二歳？　あたし小学生だった。

公彦　へえ。覚えてる？

有樹　なんか国会で騒いでたみたい。

公彦　お祝い？　セレブレイト？

有樹　バカ。逆。反対してる連中がいたんだって。デモして、流血騒ぎ。

公彦　へええええ、信じらんない。

有樹　バカよね。

公彦 バカバカ。

テレビから歓声が沸く。二人はテレビのサッカーを見て、

有樹 (半ば立ち上がりながら) ア、バカ! なにやってんだろ。決定力ないなア、相変わらず。

公彦 日本人の欠点。

有樹 昔っから決められない。(テレビの選手に) 点取んなきゃ勝てないだろ。(両手をテレビ画面に差し伸ばして) ウーーツ、ニッポン! ウーーツ、ニッポン!

公彦 それ、届くの?

有樹 届くわよ、「気」を送れば。ニッポン魂。(また両手を差し伸ばし) ウーーツ、ニッポン! ウーーツ、ニッポン! (有樹は「強い日本・誇らしい日本・美しい日本」を内面化している)

公彦 ハハ。(ほがらかに笑う)

澤口瑞穂がおずおずとおじいちゃまの部屋からやってくる。ヘルパーらしい動きやすい服装をしている。瑞穂は一見控え目だが、芯は強い。

瑞穂 あのお……

有樹 (驚いて) だれ?

瑞穂 すみません、さっきは歌ってらしたので……出て来にくくて。

有樹 だから、だれ?

公彦 ヘルパーさんだろ。

有樹 え?

公彦 おじいちゃまの。ママからメール来てた。(携帯電話を見る) グローバル介護サービス社から、またおじいちゃまの新しい介護人が来るって。

瑞穂 ええ、宋崎新之助様の介護をさせていただきます、澤口です。よろしくお願います。

有樹は瑞穂につっけんどんに言う。

有樹 あなた、さっきどうして歌わなかったの?

瑞穂 ——え?

有樹 澤口さん……なんで君が代歌わなかったのかって、聞いているのあたしは?

公彦 やめなよ、姉貴。

瑞穂 その、歌ってらしたので……お二人で……歌ってらしたので。

有樹 君が代でしょ。

瑞穂 はい……

有樹 わかってる、君が代?

公彦 いいよ、もう。(瑞穂に優しく) 家のことでわかんないことあったら、なんでも聞いてよ。トイレそこ。洗面台も。台所あっち。

瑞穂 ありがとうございます。きのうだいたい。

公彦 ア。見たの?

瑞穂 お母様から、だいたい。で、玄関の（鍵用の）カードもお預かりして。  
公彦 そお。忙しいでしょ、あの人、うちのママ。きょうはもうニューヨークで仕事だよ。

瑞穂 そう……らしいですね。

公彦 （思わず微笑む）へへ。（瑞穂に好意を抱く）へへへへ。（ヘラヘラしているが笑い方はさわやかだ）

有樹 公彦、なにヘラヘラしてんのよ。

公彦 （ふざけて）ヘラヘラ、ヘラヘラ。

瑞穂 では、失礼します。

公彦 おじいちゃまの部屋、そっちね。

瑞穂 はい。

瑞穂はさっと一礼しておじいちゃまの部屋へ去る。

有樹 なにいい顔してんのよ。ポイント低いよ、ああいう子は。

公彦 ヘルパー差別。

有樹 差別じゃなくて、現実。ヒューマンポイントが五千ポイント以下の人間とは、うちの者は付き合っちゃダメなの。（すべての国民はポイントで格付けされ

選別されている）

公彦 はいはい。（ほがらかに笑う）

テレビから歓声が上がる。バラクがゴールを決めた。

有樹 ア、バカ！ ゴール入れられちゃったじゃん。

公彦 日本、弱っ。

有樹 バカ、これからよ。

公彦 出だしが肝心でしょ、何事も。

有樹 ア、あんたね。

公彦 なに？ 怖い顔して。やだやだ。

有樹 サボったでしょ？ 奉仕。

公彦 ン？ よく知ってるね。

有樹 わかるよ。全国一斉奉仕作業じゃない。（国民の義務）

公彦 やだやだ、監視してるよ。（ほがらかに笑う。有樹を指差し冗談で）国民管理局。（国民を管理統合する国の機関）

有樹 あかね。今年最初の奉仕作業でしょ。最初が肝心なの。それにもうすぐ卒業でしょ。

公彦 はいはい。

有樹 ポイント溜めなきゃいい企業に入れなかったの。女だし、あたし。

公彦 姉貴はサボったことないのかよ。

有樹 ないよ。

公彦 優等生。

有樹 ポイント溜めなきゃいい企業に入れなかったの。女だし、あたし。

公彦 フン、俺はパパの会社だもん。継ぐ継ぐ。

有樹 あかね、それにしてもよ。ヒューマンポイントでこれから先の人生なんもか

んも決まってくんだから。結婚も。家を持つのも。

公彦 合点承知の介。

有樹 まったく。ふざけて。承知の介っていつの時代よ。(思わず笑ってしまう) によ、江戸時代?

公彦 (ほがらかに笑う)

瑞穂が来る。

瑞穂 あの……………

有樹 なに? (公彦と対するるときとちがい陰がある)

瑞穂 宋崎様が……………おじいさまが……………その……………

有樹 なによ?

公彦 なになに、言つて。(優しい)

瑞穂 その、わしの株券どうしたかって、何度も聞かれて。

有樹 株券?

瑞穂 宋崎産業の、わしの持ち株がどうか……………国債がどうか……………

公彦 気にしないで、ボケてるから。

瑞穂 ええ……………でも……………

有樹 いいから。適当に返事しといて。五分もしたら忘れてるから。

公彦 哀れ創業者の末路。

有樹 (公彦に) バカ。(瑞穂に) まともに付き合おうと大変だから。それで何人もへ

ル。パー辞めてつたし。

瑞穂 はあ……………

公彦 他には?

瑞穂 爪切りどこでしょう?

公彦 アア、はいはい。ドイツ製。おじいちゃまお気に入り。(リビングの棚から爪

切りを取り出し渡す)

瑞穂 ありがとうございます。(爪切りを見て感心して) しゃれてますね。

公彦 でしょ。おじいちゃまのこだわり。これでなきや爪切った気しないんだつて。

瑞穂 へえ。ちがうんですか、ドイツ製だと。

公彦 ブランド物だから、これ。爪切る音がちがう。職人の手仕事。いい物は、い

い。

瑞穂 へええ。

有樹 (二人の打ち解けたやり取りにイライラして、瑞穂に) 行ったら。用事が済

んだら。

瑞穂 ア、失礼しました。

瑞穂はさつとりビングを出て行く。

公彦 冷たくない?

有樹 あんたが下心ありすぎなの。

公彦 バレバレ。(ほがらかに笑う) ……おじいちゃまの他の株つて、やっぱ。パ

パ

有樹 株は動かしてなんぼでしょ。本人は管理能力がないんだから。生前贈与よ。

公彦 俺も少し売った。  
有樹 あたしもよ。

瑞穂がまたやってきている。

瑞穂 あの……

有樹 なに？ まだなんか用？

公彦 なになに？（親切で優しい）

瑞穂 その、宋崎様って、若いころどんな方だったのか、教えていただければ……

有樹 それ、必要？

公彦 ママから聞いてない？

瑞穂 なんとなくは。

有樹 必要？

瑞穂 （きっぱりと）お客様の過去のことを知っているのと、話を合わせやすいですし、その方に合った介護もできますし。介護の基本です。

有樹 うちの会社の創業者。やり手。一代で財産築いた大社長。知らない、レンズの宋崎って？ 望遠鏡から眼鏡まで。今はパパに会社譲ってボケ隠居。以上。

公彦 ま、そういうことかな。（ほがらかに笑う）  
瑞穂 はい……。

玄関のチャイムが鳴る。

有樹 （インターホンの画面を覗いて）郵便みたい。

公彦 取ってこようか。

有樹 いいよ。（瑞穂に）行ける？

瑞穂 え？

有樹 郵便受け取ってきてよ。今日が離せないから、サッカー（のテレビから）。

公彦 悪いよ。

有樹 いいのよ、ママからきつといいお金もらってるんだから。でしょ？ うちの介護料ハンパないでしょ。（高級介護をサービスを個人が買う世の中）

瑞穂 わたしは……会社通してなので……

有樹 そうなの。やよね、そういう身分。うちと直接介護契約しちゃえばよかったのに。

公彦 （瑞穂に）口悪いから気にしないでね。

瑞穂 いいえ……。

有樹 ごめん、だから取ってきてよ、郵便。

瑞穂 はい……。

瑞穂は仕方なく玄関に向かう。

有樹はスマートフォンを取り出し、インターネットで何かを調べ始める。

公彦 サッカー見ないの？

有樹 あの子、下の名前なんだっけ？

公彦 ン？（携帯電話を取り出し、見る）瑞穂……澤口瑞穂。



有樹 みずほ。みずほってどんな字？

公彦 みずほの国とかいう……

有樹 アア。(調べて)——あった。澤口瑞穂。あの子、ポイント低っ！

公彦 (有樹のスマホを覗いて変に納得する) アア……そのサイト、裏データ出てるの？ ヒューマンポイントの。

有樹 やめときなよ、ああいう子は。一生這い上がれないよ、あの手の子は。

公彦 別に。

有樹 好みでしょ？(詮索する)

公彦 (明るく)だから。別にとって。

有樹 ふふ。(小バカにして笑う)まったく。

瑞穂が赤い血の色をした封書を持って戻ってくる。顔が緊張している。

公彦 (瑞穂に)ありがとうね。

瑞穂 ……

公彦 (瑞穂の様子に)なに？ 怖い顔して。

瑞穂 どうぞ……。(封書を公彦に差し出す)

公彦 ん？ (受け取って)ヤバっ。これ召集令状じゃん、国防軍の。

有樹 ええ？

有樹と公彦は急いで赤い封書を開けて見る。

公彦 俺、免除のはずなのに……戦争……

瑞穂 でも……

有樹 バカ！ これあたしじゃん！ あたしへの召集令状。(成年男女は平等に

徴兵義務がある)

公彦 姉貴の？

でも、でも。(封書の宛名に)「有樹」って名前。

有樹 あたし。有樹。宋崎有樹。

瑞穂 ア。てつきり(弟さんの名前かと)。

有樹 バカ。

公彦 でも姉貴、徴兵免除じゃないの？ ポイント足りてるじゃんよ。

有樹 足りてるよ。

公彦 じゃ、なんでよ？

有樹 当然の義務じゃない。日本人として当たり前。徴兵の申請し直したの、この間。

公彦 ええ！ でもさ、別に姉貴が行くことないじゃない。他に行くヤツいくらでもいるでしょ。

有樹 バカ。国家のためよ……幸せって感じよ。天皇陛下の御為よ。(「天皇は日本そのものである」国家元首)

公彦 でも……、俺は免除になっただけ。

有樹 バカ。あんたはパパの会社継がなきゃでしょ。跡取りなんだから。

公彦 パパに言っただけ、裏から手を回してもらった。うちの会社ならなんとか政治家に……

有樹 だから、幸せって言ってるでしょ。あたしは行きたいの。役に立ちたいの。子どものころからの憧れだったんだから国防軍。日本国民として。天皇陛下の御為よ。

公彦 「天皇陛下」の言葉にごくごく自然に姿勢を正す）そりやそうだけど。どこに行くの？ 中東？ パラクとアメリカの戦争？

有樹 だろうね。

瑞穂は居たたまれない様子で有樹と公彦を見ている。

有樹 （瑞穂の様子に気づき、明るい調子で）あんた、なに驚いた顔してんのよ。ハハアン、もしかして、あっち側の人だったりするの？

瑞穂 いえ、別に……………  
有樹 だったら喜びなさいよ。明るい顔しなさいよ。さあ。  
瑞穂 ……………。

ト突然公彦が両手を振り上げる。目に涙をたたえている。

公彦 バンザーイー！ バンザーイー！ 姉貴、バンザーイー！

有樹 ありがとう…………公彦。（少なからず感動している）

公彦 バンザーイー！ （涙ぐんでいる） バンザーイー！ （精一杯の万歳である）

瑞穂 ……………。  
有樹 （瑞穂に）あんたも万歳してよ。日本国民なら。門出なんだから。

公彦 バンザーイー！ バンザーイー！  
瑞穂 ……………。

有樹 小学校で習わなかった？ こういうときは万歳でしょ。あんたも軍事教育受けたんでしょ？ 道德の時間に習わなかった？ （学校の義務教育で軍事教育を受ける）

瑞穂 でも…………でも…………イヤです。わたし——イヤです……………！  
有樹 国のために行くんだよ。あんたたちを守るために行くんだよ。

瑞穂 イヤです。  
有樹 どうしてさ？ どうしてイヤなわけ？ あたしの門出だよ。

公彦 （瑞穂に）だからさ、万歳しようよ、瑞穂ちゃん。  
瑞穂 瑞穂ちゃんって…………！ イヤです。イヤだからイヤです。万歳なんかしたくない。

有樹 やっぱあっち側の人？ 理屈のないイヤは、イヤとは呼べない。  
瑞穂 感情です。理屈じゃありません。イヤです。

有樹 クビにするよ……………！  
瑞穂 ……………！

有樹 公彦、携帯見せて。介護の会社に電話する、グローバルなんとかに。いや——、国民管理局に電話する。

瑞穂 ——！ （「国民管理局」と聞いてビクンツと怯える）  
有樹 あんたの国民登録番号、何番？

瑞穂の顔が怯えに震える――。

瑞穂 (恐れを抱き仕事を失いたくないので仕方なく) ……バ……バン……バンザ  
ーイ……バンザーイ……! (両手を振り上げる)

有樹 フンッ。

公彦 バンザーーイ! バンザーーイ! 姉貴、バンザーーイ!

有樹 ありがとう、公彦。ありがとう……!

公彦 バンザーーイ! バンザーーイ! 日本国、バンザーーイ! 天皇陛

下、バンザーーイ! 姉貴、バンザーーイ!

瑞穂 ……バンザーイ! バンザーイ!

公彦 バンザーーイ! バンザーーイ!

瑞穂 バンザーイ! バンザーイ!

姿勢を正し、万歳を受ける有樹。頬に感激の涙が伝う。

瑞穂と公彦の万歳の中、ゆっくりと暗くなる……:

## ☆ブリッジ

暗闇の中にダンスミュージックの「君が代」が大音量で流れる。

そこはクラブでもあるのか派手な照明が交差している。

その明かりと暗闇の中で瑞穂が髪を振り乱し狂ったように踊っている。仕事  
や生活のストレス、今の世の中の息苦しさをすべて振り払うかのように――

―トそこに公彦が現れる。瑞穂の気を引くように踊り始める。

瑞穂も公彦に気づく。

二人は向かい合い、笑みを交わし、互いを確かめ合うように踊り続ける……

…やがて暗くなる。

## ■ 2景

1景と同じマンションのリビング。

1景から約半年経っている。

公彦がパソコンに向かっていている。パソコンのインターネット電話で有樹と話  
しているところ。

有樹はパソコン上の画面に映っている。(舞台の別空間にいる。または有樹の  
話している映像が舞台に流れている)

有樹のいる場所はバラク領内の日本国防軍の軍事キャンプのテント内。有樹  
は主に後方支援業務をしているが、今は休憩中。迷彩色の軍服を着ている。

公彦 どうしたの?

有樹 (パソコンの画面に現れつつ) ごめん。なんか音がしてさ外で、さっきから。

公彦 (自分の後方をしきりに気にしているが、パソコンの前の椅子にすわる)  
ヤバいの？

有樹 そんなんじゃないと思うけど。ちよつとごめん。(席を立ち、画面から消える)  
公彦 姉貴。

有樹 (画面に戻ってきて) 大丈夫みたい。

公彦 やっぱ危険？

有樹 ここさ、テントだから、後方支援の。前線じゃないし。

公彦 だったらいいけど。

有樹 やってることも雑務だし、雑務。

公彦 ざつむ？

有樹 物品の確認したり、伝票チェックしたり。あとアメリカ軍との連絡調整。

公彦 アア、総務的な仕事ね。安心じゃん。

有樹 まあね。あたしなんかだと、戦闘行為に行けるわけじゃないし。

公彦 今はなに？ 大丈夫？

有樹 休憩中よ。

公彦 戦場にも休憩あんのね。

有樹 あるよ。休まなきゃ神経持たない。

公彦 アア。……きつと。パパがアレしたんだよ。

有樹 アレってなによ？

公彦 そこ、人いない？

有樹 いない。

公彦 パパが裏で手を回したんだよ、姉貴がわざわざバラクで危険な前線に行かないでいいように。

有樹 そんなんじゃないわよ。やっぱ女は女よ。前線には行かしてくれない。

公彦 パパだと思うけど。代議士の、ほら、大田先生に頼んだんだと思う。

有樹 どっちでもいいわよ。甘いもんじゃなかったってこと。

公彦 やっぱ厳しい？

有樹 やっぱね。軍隊だもん。

公彦 (敬礼する)「イエッサー！」の世界？

有樹 当たり前でしょ。

公彦 姉貴、変わった？ 国防軍入って。もう半年だっけ？

有樹 変わらないよ。前より強くなった。

公彦 ますます？

有樹 バカ。でもやりがいある。国を守ってるって感じバリバリする。

公彦 そう。(ほがらかに笑う)

有樹 (後ろを振り向いて気にして) なんだろあの音？ 車かな？ (過敏になっている)

公彦 大丈夫？ (心配だが、ほがらかに笑う)

有樹はパソコン画面の公彦に視線を戻し、

有樹 そっち大学はどう？ 授業出てんの？ 単位全部取れた？ ちゃんと奉仕  
公彦 作業とかも出てんの？  
出てる出てる。

有樹 本当に？  
公彦 出てる出てる。  
有樹 バカにして。卒業でしよもうすぐ。大丈夫なの？  
公彦 卒業できなくても、就職はできる。就職しなくちゃならない、宋崎産業に。  
有樹 パパに恥かかせないでよ。  
公彦 イエッサー。  
有樹 ホント、バカ。  
公彦 ふふふ。(ほがらかに笑う)  
有樹 ははは。(つられて笑う)

おじいちゃまの部屋から瑞穂が公彦を呼ぶ声がする。切迫した感じの呼び声だ。

瑞穂の声 公彦っ。公彦っ。  
有樹 ん？ だれかいる？ そこ？  
公彦 別に……………  
瑞穂の声 公彦っってば！  
有樹 呼んでるじゃん、公彦を。

ヘルパー姿の瑞穂がリビングに入ってくる。

瑞穂 公彦、おじいちゃまが、変！  
公彦 (身振りで「今、姉貴と話してんの、ヤバイよ」と伝える)  
瑞穂 ア！ (小声になって) もしかして、お姉さん？  
有樹 あのヘルパーいるの？ 澤口？ ねえ？ いるんでしょ？  
公彦 ハハ、バレちゃった。  
瑞穂 (有樹の映っている画面に) こんにちは。ア、そっち「こんにちは」でいいですか？  
有樹 (慥然として) あんた、まだ付き合ってるの？  
瑞穂 え？  
有樹 「公彦」って今、呼び捨てにしてたじゃない？  
瑞穂 いえ……………その……………  
有樹 あんたたち、まだ付き合ってるの？  
瑞穂 いえ……………(同時に)  
公彦 まあね……………(同時に)  
有樹 (瑞穂に) こっち来る前に、あたし別れてって言ったじゃない。あんた、「はい」って言ったじゃない。  
瑞穂 はい……………  
有樹 もうっ。なに考えてんのよ。  
公彦 姉貴、心配いらないから。  
瑞穂 (有樹の存在を意識して公彦に改まった言葉遣いで) 公彦……………さん、おじいさまの様子が変なんです。ちよつと来てもらえますか。(有樹の映っている画面に) 失礼します。  
有樹 ちよつと。話まだ！

瑞穂は急ぎ奥のおじいちゃまの部屋へ去る。

公彦 (明るく) 彼女もわかってるから、俺ら付き合っても結婚できないって。ど

うせ俺はパパの選んだ相手と結婚しなくちゃダメなんだし。

有樹 子ども出来たらどうするの。

公彦 ノープロブレム。

有樹 澤口の親、捕まってるのよ。

公彦 知ってるよ……。俺もバカじゃないもの。ネットで調べた。

有樹 今どき労働組合なんて信じられる？

公彦 ないない。

有樹 憲法で禁止されてんのよ。ストライキとかやってたんだから。先導者。

公彦 事務局長だって聞いたけど。

有樹 バカ。秘密結社禁止法で二年食らってるんだから、澤口の父親。

公彦 親は親だろ。

有樹 政府の国民管理局が怖いもんだから、天皇陛下に直接メールしたのよ。「労働

者に団結権を」って、直談判のメールとか送ってたんだから。

公彦 あれはね……。俺もやりすぎだと思う……。陛下バカにしてるよ。

有樹 あのね、親が親だと這い上がれないの、今の世の中。下層の人間はずっと下

層なの。ヒューマンポイントが溜まんないんだから。マイナスポイントから

人生始まるんだから。

公彦 アア。

有樹 ああいう人間は、あんたみたいなポイントが上位の男捕まえて、子ども作っ

て、こっちの世界にもぐり込むしかチャンスないの。わかってんの、公彦？

公彦 (弱い声で) イエッサー。

有樹は「やれやれ」とため息をつく。

有樹 澤口、呼んできてよ。

公彦 え？

有樹 あたしがきつく言っとくから。

公彦 おじいちゃまの世話してんだけど……

有樹 それ仕事でしょ。仕事以外は変なことするなって話。

公彦 あれ？ さっき澤口なんか言ってたな……。おじいちゃまが変だつて。(ほが

らかに笑つて) いつも変なんだけどさ、おじいちゃま。

公彦はおじいちゃまの部屋に瑞穂を呼びに行く。

……有樹はパソコン上の画面の中に一人になる。

有樹は周りに人がいないのを確かめると、自分のバッグから錠剤のビンを取り出す。蓋を開け、薬を二、三錠飲み下す。危険ドラッグだ。

有樹 (息を深く吐く) ふう……。

テントの外が騒がしい。人の言い争う声がする。もめているらしい。

日本語と現地の言葉が入り混じる。戦地独特の緊張感が漂う。

有樹　なんだろ……？

公彦が瑞穂を連れてリビングに戻ってくる。瑞穂は嫌々ついて来たといった様子。リビングの隅で……

瑞穂　わたし、おじいさまが……

公彦　だから、姉貴がさ。話があるんだって。

瑞穂　でもおじいさまになにかあったら、責任責任ってうるさいから……

公彦　ちよつと話聞いただけ。ね。ね。「はいはい」言ってるやいいんだからさ。

瑞穂　……………

瑞穂は仕方なくパソコンの画面の前にすわる。

瑞穂　なんでしよう、話って……

有樹　あのね、あんたスパイじゃないの？

公彦　姉貴、な、なに言ってるの！（困惑して笑ってしまう）

瑞穂　ちがいます。

有樹　どうだか。

公彦　姉貴。

有樹　うちの会社のこと調べるために、うまくヘルパーに成りすましてんじゃないの？

瑞穂　ちがいます。

有樹　うちは、あんたが思ってるような軍需産業じゃありませんから。

公彦　もろいいよ。

瑞穂　……………

有樹　レンズの会社です。望遠鏡。双眼鏡。

公彦　戦車の潜望鏡とか、銃のスコープにも使ってたから、ある意味同じじゃん。

瑞穂　……………

有樹　うちには労働組合ありません。

公彦　姉貴。

短い沈黙。

瑞穂　あの……、結婚する気ありませんから。

有樹　当たり前じゃない。

公彦　そんな付き合っていないし、俺たち。（ほがらかに笑う）

瑞穂　それが心配なんですよ、お姉さんは。（有樹に）四回寝ましたけど、避妊して  
ます。

公彦　ア。

瑞穂　公彦が用心するから。仕方なく。

公彦　バカ。プライベート。個人情報だよ。

瑞穂　フン。どうぞご安心を。（少し嫌味）

有樹 ポイント低い人間は考えることが幼稚。生殖本能だけ。

公彦 もうやめよ。(有樹に) そっち行って考え方ゆがんでない？ 生殖本能とか、なに。

有樹 あたしは至ってまとも。

公彦 いいよ。今の言いすぎた。

瑞穂 失礼します。(行ってしまおうとする)

公彦 このタイミングで行っちゃアレだよ。気まずいよ。

瑞穂 だから！ おじいさまが心配なの！

有樹 いいよ、行かせてやんなよ。(瑞穂に) こっち戻ってこなくていい！

公彦 姉貴もさ。

瑞穂 失礼します！(リビングを出ていく)

有樹 フンッ！(薬の小瓶をテーブルに叩きつけ八つ当たりする)

有樹の映っている画面の外から声がする。有樹の上官の声だ。

上官の声 (緊迫している) 宋崎、来てくれ！ 早く。

有樹 はいっ！

公彦 俺、知らないからな。(瑞穂の去った方を気にしている)

上官の声 (暗号文) sos (キューキューマルロク)だ。至急！

有樹 はいっ！(公彦に) ちよっともめてるみたい、外で。

公彦 え？

有樹 民間車両がテントの入口に突っ込んできたみたい。

公彦 なんだよ、それ？

有樹 よくあるのよ、嫌がらせ。現地人の。パラク人の。ガレキ積んだ車とか。

公彦 ヤバくないの。

有樹 ここじゃこんなものしよつちゅうよ。毎日何人も死んでるんだから。きのうも

七人死んだ。もう「数字」でしかない。

公彦 へええ、なんか姉貴すごっ(凄い)。

瑞穂がリビングのドアを開け、静かな声で叫ぶ。顔面が蒼白になっている。

瑞穂 公彦っ、救急車呼んで。

公彦 え？

瑞穂 救急車、早くっ。おじいさま——息してないっ。

公彦 ええっ！

瑞穂 早くっ。お願いっ。(部屋へ急ぎ戻る)

公彦は慌てて携帯電話をかけながらおじいちゃまの部屋へ急ぎ行く。

公彦 もしもし！ もしもし！ 救急車、救急車を——(リビングを走り去る)

リビングは無になる。

有樹 ねえ！ どうしたのよ？ 公彦？ ねえ？ おじいちゃまなにあった



の！ ねえ！  
上官の声 宋崎、どうした！ 早く来い！ 宋崎！ 早く！  
有樹 イエッサー！

有樹はパソコンの前から離れたいが、上官の命令に従わざるを得ない。緊張と恐怖からさらにもう一度ドラッグをあたり、仕方なく急ぎテントの外へ飛び出していく。画面から有樹の姿が消える。

……しばらくして公彦がリビングに戻ってくる。手が小刻みに震えている。ショックを受け、顔の血の気を失い、消沈している。そのあとから瑞穂も静かに入ってくる。無言。

公彦 ……ヤバイよ。

瑞穂 ……。

公彦 死んじゃったの……おじいちゃま？

瑞穂 たぶん……。

公彦 (軽い吐き気を催す)

瑞穂 大丈夫？

公彦 (パソコンに近寄り) 姉貴。姉貴。おじいちゃま死んじゃった。死んじゃったよ。どこいんのよ？ 姉貴！ おじいちゃま、死んだんだってば！

瑞穂 いないみたい……。

短い沈黙。

公彦 俺、初めて。

瑞穂 え？

公彦 人死ぬの見るの。

瑞穂 ……。

公彦 この辺が……。(胸を押さえる)

瑞穂 わたしも、初めて。死ぬ瞬間まじまじ見たの。

公彦 ヤバイよ……。

瑞穂 わたしダメだ……クビかな……責任取れないよ……

——ト突然パソコンの画面から大きな爆発音が響く。有樹のいたテントの内部が外からの爆風で瞬時激しく揺れる。テントの外で爆発が起きたらしい。おそらく民間車両に乗り込んだテロリストの自爆テロだ。

瑞穂 キヤッ！

公彦 なに！

瑞穂 テント、揺れてる！

公彦 赤くなった、今？ 燃えてんの？

瑞穂 爆発したんじゃ？

公彦 姉貴！ 姉貴！ 姉貴！ 姉貴！

瑞穂 ヤダこれ、こんなの。テロ？ テロなの？

公彦 縁起でもないこと言うな！ 姉貴！ 姉貴！ 姉貴！ 姉貴！ 姉貴！！！！  
瑞穂 ……ア、切れた——。

パソコンの画面が一瞬血のように赤くなり、すぐに黒くシャットダウンする。

瑞穂 ——ヤダ。ヤダよ。

公彦 姉貴いい……！！ うううううつ。（後ずさるようにしてパソコンの画面から離れどこかに逃げ込もうとする。しかし視線はパソコンから離られない）

瑞穂 ねえ！ ねえ！

公彦 姉貴……！！ おじいちゃま……！！ 姉貴……！！

瑞穂 ねえ！ しっかりしてよ。ねえ！

公彦 ……うううつ。うううううつ。（瑞穂にしがみつく。瑞穂の胸の中に幼子のよう  
うに逃げ込もうとする）

公彦は瑞穂にしがみついたまま震えている。

瑞穂はその公彦を邪険にもできず、また自分も不安に駆られ呆然としてしま  
う。

公彦は救いを求めるかのように瑞穂の唇に唇を重ねる。

二人は激しくキスしてしまう………ゆっくりと暗くなる。

### ☆ブリッジ

暗闇の中にダンスミュージックの「君が代」が大音量で流れてくる。派手な  
照明が交差する。

その明かりと暗闇の中で瑞穂と公彦が向き合って絡みつくように狂ったよ  
うに激しく踊っている。しかしまるで別々の孤独の中にいるかのようでもあ  
る………やがて公彦は瑞穂から少しずつ離れていく。公彦は踊るのをやめ、  
踊る瑞穂をじつと見つめる——ゆっくりと暗くなる。

### ■ 3景

宋崎姉弟のマンション。そのリビング。

2景から約一年が経っている。

有樹と瑞穂がソファに並んですわり、テレビのサッカー中継を観ている。日  
本対ノルランド戦。ノルランドは北欧の架空の小さな国。社会福祉国家であ  
り、サッカー強国でもある。

有樹と瑞穂は肩を寄せ合うように引っついてすわっている。一見仲が良さそ  
う。ビスケットを食べている。1景の出だしと雰囲気似ている。

有樹はピンクのトレーナーの上下を着ている。有樹は戦地。バラクでの負傷で  
下半身不随になっている。腕の力も弱っている。瑞穂を自分専属のヘルパー

として雇い介護サービスを受けている。  
瑞穂はヘルパーらしい動きやすい地味な服装をしている。

有樹 (サッカーを観ている) アア、また(日本が)ゴール外した! もうっ。

瑞穂 ダメですか、日本代表?

有樹 全然。相変わらず弱い。決定力不足。ここぞというときにゴール外す。もう

っ応援してんのに。ていうか、ノルランドが強いのか。

瑞穂 ノルランドっていい国らしいですよ。(笑顔になる)

有樹 なに対戦相手褒めてんのよ。ちっちゃい国でしょここ、北欧の。確か四国ぐ  
らしいの。

瑞穂 ですけど、いい国です。ノルランド。

短い間。

有樹 ここって日本と真逆の国でしょ。

瑞穂 真逆って?

有樹 「競争」から降りちゃった国でしょ? ノルランドって。

瑞穂 福祉の国ではありませんけど……

有樹 サッカーは強いじゃん。

瑞穂 福祉とは関係ないかと。

有樹 消費税五十パーセントの国でしょ?

瑞穂 社会福祉税です。全部社会保障に回されるんです。日本とちがつて。

有樹 そっかそっか、ヨーロッパって北欧も、基本サッカー強いのか。

瑞穂 たぶん……くわしくは知りませんが。食べます?(ビスケットを)

有樹 うん。(瑞穂にビスケットを口に運んで食べさせてもらう)ノルランドって軍  
隊あるの?

瑞穂 (有樹の口元にビスケットを運んでやっている)ありますよ、確か。なんで  
ですか?

有樹 昔の日本みたいに戦争しない国かと思っ

瑞穂 ノルランドが、ですか?

有樹 そう、そんなイメージ。だから、軍隊もないのかと。

瑞穂 あります。学校で習いましたから。

有樹 学校? ヘルパーの?

瑞穂 福祉の、です。ノルランドって福祉やってる子はみんな習うんです。

有樹 あんた、一応学校出てんの?

瑞穂 貧乏なんで、奨学生ですけど。ただ今、奨学金の借金を返済中です。

有樹 へええ、知らなかった。ヘルパーって研修だけでなれんのかと。

瑞穂 いえいえ、ちゃんと学校出てますよ、わたしだって。ちなみに——世界一幸  
福な国だと言われています。

有樹 どこが? まさかノルランド?

瑞穂 ノルランド。

有樹 だれが言ってるんの、それ? 国連?

瑞穂 ノルランド国民が。

有樹 自分で言ってるわけ、国民が。自分の国は幸せだって。世界一幸福だって。

有樹 アンケート調査でそう感じてる人が世界一多いんです。医療も教育も年金も全部タダだし。

有樹 それみんな消費税でしょ。おめでたい。ホント幸せ者。あたしは日本が好き。日本が一番よ。

有樹 今でも——ですか？

有樹 ……なに、それ？

有樹 いえ、別に。

有樹 世界で一番は日本よ。今までも、これからも。

有樹 ……ですよね、宋崎さんは。

有樹 ……。(首を無理にねじり隣にいる瑞穂をじつとにらむ)

やや気まずい間が二人の間に生まれる。

有樹 (話題を変えるように) おトイレいいですか？

有樹 まだいい。(サツカーの)前半終わってからです。

有樹 じゃ、ちよっとわたし。(ト立ち上がる)

有樹 ——ア。バカ。(身体の支えにしていた瑞穂がどいたので身体が横に傾く。自分の身体を手で支えようとするが、腕の力も弱くずりずりとソファに倒れてしまう)

有樹 ア。ごめんなさい。

有樹 (ソファに横に倒れたまま——冷ややかに) わざと。

有樹 そんな。ちがいます。

有樹 わかっているでしょ、こうなんの。身体言うときかないんだから。手の力も弱いんだから。

有樹 はい。すみません。(有樹の身体を支えつつ起こす) ケガとか？

有樹 ない。——まったく。

有樹の携帯電話(スマートフォン)が鳴る。

有樹 (イライラして) もうっ。取って、携帯。

有樹 はい。(ソファに無造作に置かれていたスマートフォンを取り有樹の耳に当ててやる) 持ってます(スマートフォンを)。

有樹 (電話相手と話す) はい、宋崎です。

有樹 ……。

有樹 ——はい。はい。(電話の相手に対して姿勢を正しているのがわかる。国防軍の上官からの電話だ) わたくしはっ、一切後悔しておりませんっ。自己責任でありますから。はい。はい。そうおっしゃっていただけるだけでも——。

有樹 ——はい、はい。もったいないお言葉——ありがとうございます。国からも表彰と、ええ、恩給ポイントも付きましたし。はい。はい。ありがとうございます

有樹 います。もう、そこまでおっしゃっていただければ。——陛下からも、陛下からも、国の式典で、はい、直接、ええ、直接お声をかけていただきまして——身体のこと心配していただいて——はい、はい。それだけでわたくしはっ、わたくしはっ——報いられたと。

有樹 ………。 (スマートフォンを持つ手をだるそうに、有樹の耳から外さないように持ち替える。電話の内容に少し冷めた態度である)

有樹 ———はい。はい。ありがとうございます。リハビリに励みまして、社会復帰を、はい、あせらないで、はい、あせらずにやってみてください……お電話ありがとうございます。隊長も、どうかお身体を大切に、お元気でお願いしますませ。はい。はい。失礼します。…… (相手が電話を切った)ふううっ……。 (ホッと緊張の息を吐く)

瑞穂 (電話を切り、スマートフォンを元あった場所に置く)

……長い間。有樹は何か考え込んでいる。隊長との会話とは裏腹に、自分の今の境遇が受け入れがたく思われてくる。

有樹 ………。ねえ、澤口。

瑞穂 はい？

有樹 どっか行かない？

瑞穂 どこかって？

有樹 あんた大変だろうけどさ。一緒にどっか行こうよ。

瑞穂 いえ、わたしは、大変とかは。

有樹 前にも話したでしょ、海外。海外行こう。空気変えようよ。息がつかまるよ。

瑞穂 ええ、でも……

有樹 あたしと行くのイヤ？ 大変？

瑞穂 そうじゃなくて。

有樹 特別手当出さからさ、お金。いいでしょ？

瑞穂 それ、仕事ですか、旅行？

有樹 行こうよ。あたしもリハビリ真面目にやるから。仕事ならいいでしょ、澤口？

瑞穂 ええ、仕事なら。

有樹 決まり。(喜ぶ) ふふ。よし。

瑞穂 じゃあ——、ノルランドなら。

有樹は急に怒り出す。

有樹 なに言ってるのよ！ あんた！

瑞穂 え？

有樹 あんたがなんで行き先決めんの！ すぐ勘違いするんだから。

瑞穂 はい……、すみません。今のは軽い気持ちで……言っただけで……

有樹 あんたのポイントじゃ一生海外なんて行けないでしょ。

瑞穂 ………。

有樹 人の金で行くのに、国指定してんじゃないわよ！

瑞穂 ………。

有樹 ヘルパーの代わりは他にもいるんだから。調子に乗って。

瑞穂もさすがに頭にカチンと来て、

瑞穂 じゃ——、(ソファから立ち上がり) 辞めます、わたし！

有樹 —ア、バカ。(支えがなくなりゆっくりとずり倒れる)  
瑞穂 ア。  
有樹 起こしなさいよ！ なにしてんのよ。あんた辞めたら、あたしが困るでしょ。  
起こしなさいよ！  
瑞穂 すみません。(有樹を抱き起こす)  
有樹 もうっ、澤口。バカ。  
瑞穂 すみません。  
有樹 バカなんだから。

公彦が外から帰ってくる。高級ブランドの感じのいいスーツを着ている。こざっぱりとして上品である。社会人になったことが一目でわかる。髪形もきちんとして整っている。公彦は宋崎産業の社長である父のセッティングした見合の帰り。瑞穂とは大学を卒業したときに別れている。

公彦 なにしてんの、またスパイいじめてんの。(半分冗談)

有樹 帰ってたの？ どうだった、見合い？

公彦 美人美人。

有樹 あたしより？

公彦 (ほがらかに笑う)

有樹 あたしと気が合いそう？ その社長令嬢。

公彦 姉貴と気が合う相手なんているかな？

有樹 言うなあ。

公彦 (ほがらかに笑う)

有樹 やめちゃえば。まだ早いよ、あんたの年齢じゃ。

公彦 んん、仕事絡みでもありますから。パパの業務命令。

有樹 結婚が？

公彦 会社大事ですから。相手、大資産家の娘だし。

有樹 さすが、宋崎産業の未来の若社長。

公彦 いえいえ、まだまだ平社員ですから。それに——振られちゃいましたから。

有樹 だれに？ 澤口に？

公彦 ハートブレイク。(自分の胸を指す)

有樹 バカ。こんなのどこがいいの。言ったでしょ、住む世界がちがうって。

公彦 本人目の前にして。

有樹 気にしてないよ。(瑞穂に) 気にしてないよね、澤口？

瑞穂 はい。全然。

公彦 言わせてるんじゃない。

有樹 別れたんでしょ。終わったことをグチグチ言わない。

公彦 姉貴が雇うからだろ、また。

有樹 澤口がよかつたんだもん。他知らないし、ヘルパー。

公彦 やりにくいよ。(瑞穂に) な。

瑞穂 仕事ですから。

有樹 だって。

公彦 やれやれ。別のヘルパーたくさんいるだろ。

有樹 澤口がいいのよ。気が置けない。四六時中一緒にいるんだから、変に同情が

ないほうがいい。

瑞穂 同情してますよわたし、心の底では。

有樹 (瑞穂の受け答えに笑ってしまふ) ハハッ。こういう無神経なところが好きなの！ 下に落ちたら下の人間といるのが心地いいのよ！

公彦 またあ。褒めてんだか、けなしてんだか。(瑞穂に) な。

瑞穂 いえいえ。

有樹 (変に明るく) 同情いらな〜い。自己責任です。

公彦 (ほがらかに笑うしかない。皮相な笑いだが上品である)

テレビで歓声が起こる。日本代表がノルランドにゴールを決めた。

公彦 (テレビを見て) ——ア。オオッ。

有樹 ゴール！ ゴール！ ゴール！

公彦 オ、先制点。やるじゃん、日本代表。

有樹 日本は強くなかつちゃ。行けえつ、ニッポン！ ズタズタにやってやれ！

公彦 ザアマミロ、ノルランド！

有樹 姉貴、興奮しすぎ。たかがサッカーじゃん。これ、親善試合でしょ？

公彦 日本は勝たなきゃいけないのよ、どんときも！ ウーッ、ニッポン！

有樹 ウーッ、ニッポン！ 行け行け行け！ もう一発かませろお、ノルラ

公彦 ンドに！

瑞穂 落ち着けよ。(ほがらかに笑う。瑞穂に) 最近こんな調子？

公彦 ええ……日本代表の試合とか見ると。(有樹を苦笑して見る)

短い間。

有樹 聞いてよ、公彦。澤口さあ、ノルランドが好きなんだって。(小バカにしてい

公彦 る)

有樹 ノルランド？

公彦 世界一幸福な国なんだって。国民全部がそう思ってるんだって。(茶化して田

有樹 舎者風に) オラの国は世界一スアワセだなあって。

瑞穂 ノルランドの……国民が？

有樹 (小バカにして笑う) そう！

瑞穂 きつと——

有樹 ……きつと、ちがうなにかが見つかりますよ。もし宋崎さんがノルランド

有樹 に行ったなら。きつと！

公彦 (公彦に) これこれ、こうやってあたしを感染してくるの。

有樹 カンセン？

瑞穂 あたしは強い日本が好きなの。澤口といると感染しそうでヤなの。

有樹 わたしといると……感染って？

公彦 弱っちい心がよ。感染しそうでヤなの。

有樹 感染って、言い方が。

公彦 感染したら、自分崩れそうでイヤなの、プライドが。あたしはこのままなん

有樹 だからずっと！ いいよ、なにも見つけなくても！ 落ちるとこまで落ちた

ら、よくわかるのよ、弱肉強食の世の中が。「競争」の世の中が。あたしなんか、(ト自分の不自由な身体を示す)この先ずっとポイント食いつぶして生きていくしかないんだから。強くなきゃいけないのよ。お金がなくなっちゃ。身分が高くなっちゃ。自分守んなきゃ。

公彦 (冗談めかして) そんなもんですか？

有樹 そんなもんよ。

瑞穂 ……そうかもしれません、たぶん今の世の中。——でも、でもきつとなにかありますよ、世界一の福祉の国ですから。

有樹 言っとくけど、もしノルランドに行っても、あんたのその変な体質押し付けられないですよ。

瑞穂 変な体質……？

有樹 弱っちい、メソメソした、同情心みたいな。人にやさしさ配って歩くみたいな。公彦の気を惹いた、あんたの体質。

瑞穂 わたしそんなメソメソしてませんし、公彦さんの気を惹いたこともありません。

有樹 (バカにして) どうだか。

瑞穂 (怒って) じゃ、なんでわたしなんかをヘルパーに雇ったんです？ 是非につて頼んできたの、宋崎さんじゃないですか！

有樹 (テレビのサッカーを見て) 行け行け行け行け！ 行け行け行け行け！ ウーッ、ニッポン！ ウーッ、ニッポン！ (瑞穂の問いには応えないで)

瑞穂 あんた、ちよっとずつあたしを味方にしようとしてない？ そっち側の人間にしようとしてない？ あたしがあんなを買ったんだよ。あたしが仕事与えてあげてんじやない。

有樹 わたしを、じゃないです。わたしの提供する介護サービスにお金をいただいでるんです。それに契約は、宋崎さんのお父様と結んだものです。

有樹 だから！ 同じことですよ。あたしがパパに頼んだの、澤口の父親のことでやかく言われたけど。——わかる？ あんたはあんなのサービスが唯一の武器なんでしょ？ 商品なんでしょ？ それをあたしが買ってるの！ わかる？ あたしが上なの、澤口より。

公彦 言いすぎだよ、姉貴。

有樹 (二人を無視して) 行け行け行け行け！ 行け行け行け行け！ ウーッ、ニッポン！ ウーッ、ニッポン！

瑞穂 ……。(有樹を複雑な表情でじっと見ている)

間。

公彦 (瑞穂に小声で) ちよっと、いい？

瑞穂 え？

公彦 話がある。

瑞穂 わたし、ない。

公彦 ちよっとだけだから。

公彦は瑞穂をリビングの隅に連れていく。瑞穂は有樹が倒れないように気遣い、仕方なく公彦に従いリビングの隅に行く。



公彦 俺、婚約やめるから。

瑞穂 いいけど別に。関係ないから。

公彦 だから。ちよっとだけ話聞いてよ。

瑞穂 そっちが別れるって言い出したんじゃない。就職するからって、パパに言われて会社継がなきゃだからって。なによ今さら。

公彦 んんん、そうなんだけど。

瑞穂 バカじゃない、(公彦の動作を真似して)「ハートブレイク」って。

公彦 (困ってほがらかに笑う)でも———なにか前とちがうんだ。ちがっちゃってるんだ、俺。

瑞穂 公彦はね———お財布の中に二千円しか持ってない人間の気持ち、わかんないでしょ？

公彦 (ほがらかに笑って)それは俺の責任じゃない。

瑞穂 (あきれて)わたし、お姉さんのお世話しなきゃだから。

公彦 (有樹に) 姉貴、ちよっと澤口借りる。

有樹 返してよ、あたしのなんだから。

公彦 行こう。な。ちよっと。

公彦は瑞穂を隣の部屋へ連れ出す。

有樹 (二人を見送って)なにやっつてんだか。

有樹は独りになる。しばらく二人の去った部屋のほうを首を無理に傾けて見ている。———ト無理な体勢を取ったためにバランスを崩し、次第に身体が傾いていく。

有樹 アア……アアア…… (身体を手で支えようとするがゆっくりとずり倒れる)

有樹はソファの背もたれからずり倒れてしまう。仕方なく有樹は横に倒れたままテレビを見る。

有樹 まったく…… (情けない)。(心なしか元気がない) 行け行け行け行け…… 行け行け行け行け…… ウーッ、ニッポン…… ウーッ、ニッポン…… (思わず苦笑し) ノルランドか……。 「きつとなにかあります」か……。 幸福の国か……。 —— バカ丸出し。

テレビでは日本代表がまたゴールをし損ねる。

有樹 ああっ、もうっ！ こんなのはっかし！ 決めろよ、ゴール。バカ、ニッポン！ —— アツ……！

有樹は急に顔をしかめ、しまったという表情をする。鼻を動かし、自分の異臭を嗅ぐ。確かに漏らしていることに気づく。筋肉の弱った手を自分のお尻

に回し、感触を確かめてみる。その手を自分の鼻で嗅ぐ。

有樹 チェツ、やっちゃった……。 (思わず舌打ちをする)

瑞穂が戻ってくる。

有樹 (瑞穂に気づき、無理に元氣ぶってお漏らしをごまかし) 行け行け行け行け！

行け行け行け行け！ ウーッ、ニッポン！ ウーッ、ニッポン！

瑞穂 (半分ふざけて) 行け行け行け行け！ 行け行け行け行け！ ウーッ、ノ

ルランド！ ウーッ、ノルランド！

有樹 (負けん気になって) 行け行け行け行け！ ウーッ、ニッポン！ ウーッ

ッ、ニッポン！

瑞穂 (対抗して) 行け行け行け行け！ ウーッ、ノルランド！ ウーッ、ノ

ルランド！

有樹 ウーッ、ニッポン！ ウーッ、ニッポン！

瑞穂 (有樹に近づき) ウーッ、ノルランド！ ウーッ、ノルランド！

有樹 ニッポン！ ニッポン！

瑞穂 (有樹と顔と顔をつき合わせ) ノルランド！ ノルランド！

有樹 ニッポン！

瑞穂 ノルランド！

有樹 ニッポン！

瑞穂 ノルランド！

二人は思わず笑ってしまう。

瑞穂は有樹の異臭に気づいている。

瑞穂 紙オムツ——、替えましようね。

有樹 ……うん。(悄然とする)

瑞穂 (優しい笑顔) 興奮しすぎたみたいですね。

有樹 ……。

瑞穂 起こしますね。(有樹を抱き起こす) 行きましょ、トイレ。

有樹 公彦は？

瑞穂 さあ？ (冗談めかして) わたしにフラれて泣いてるのかも。ふふ。

有樹 いいの？ その、ふたりは？

瑞穂 (半分冗談にして) ヒューマンポイントがつり合いませんから、わたしとあ

の人じゃ。失礼します。(抱きかかえる)

瑞穂は有樹をソファから抱きかかえる。ソファの裏に隠れていた車椅子を引

き寄せ、有樹をすわらせる。

有樹 (唐突にしかし思い切って) いっ行く、澤口？

瑞穂 え？

有樹 来週、行っちゃお。

瑞穂 なんです？

有樹 ノルランド。

瑞穂 (微笑んで) —— 感染しますよお。

有樹 バカ。

瑞穂 それでもいいなら。

有樹 フン。もう免疫できてんのよあたしには、澤口感染予防の。——じゃ決定ね。パパに言って飛行機のチケット用意してもらおう。あんたもわたしの物、用意しといて、旅行とかの。

瑞穂 はい。

有樹 (介助されながら) いい? あたしのほうが上なんだからね、あんた買って

瑞穂 んだからね。

瑞穂 はいはい。でも、わたしをじゃなくて、わたしのサービスを、です。わたしの労働力を、です。

有樹 いいよ、どっちでも。

いつの間にか公彦が来てドアのそばで二人を見ている。

瑞穂は有樹を車椅子に乗せ、公彦がいることに気づきチラと見て、

瑞穂 (半分ふざけて半分本気で) では、有樹さんに冷たい日本を捨てて、幸福の

有樹 国ノルランドへ出発します。

瑞穂 いいよ、バカ。—— (強がって) 感染しないんだから、あたしは。

瑞穂 出発——っ!

瑞穂は有樹の乗った車椅子を押してトイレへ向かう。

公彦は複雑な笑みを浮かべて二人を見送る……

(幕)

【参考文献】

- 『世界一幸福な国デンマークの暮らし方』千葉忠夫／PHP新書
- 『「生活大国」デンマークの福祉政策』野村武夫／ミネルヴァ書房
- 『社会保障を学ぶ』日野秀逸／日本医療福祉生活協同組合連合会
- 『初めての介護―心と技術』川島みどり編／中央法規出版
- 『理不尽社会に言葉の力を』小森陽一／新日本出版社
- 『安倍晋三と岸信介』大下英治／角川SSC新書
- 『新しい国へ』安倍晋三／文春新書
- 『日本よ、世界の真ん中で咲き誇れ』安倍晋三・百田尚樹／ワック
- 『総理の原稿』平田オリザ・松井孝治／岩波書店
- 『思想史の中のマルクス』鈴木直／NHK出版
- 『現代の政治課題と「資本論」』関野秀明／学習の友社
- 『現代を生きる基礎理論』関西勤労者教育協会編集・発行
- 『民主主義はいかにして劣化するか』斎藤貴男／KKベストセラーズ
- 『日本の決断』池上彰／角川oneテーマ21
- 『愛と暴力の戦後とその後』赤坂真理／講談社現代新書
- 『終わらないイラク戦争』編者嘉指信雄・森瀧春子・豊田直巳／勉誠出版